

Title	連体修飾構文の認知言語学的研究( Abstract_要旨 )
Author(s)	神澤, 克徳
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2018-03-26
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/doctor.k21182">https://doi.org/10.14989/doctor.k21182</a>
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	ETD

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	神澤 克徳
論文題目	連体修飾構文の認知言語学的研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、認知言語学の立場から、日本語の連体修飾構文について体系的に分析を行った研究である。全体は6章から構成される。</p> <p>序論である第1章に続き、第2章では本論文の分析の基礎となる先行研究および理論的枠組みを提示する。日本語の連体修飾に関する先行研究では、修飾部が形容詞や形容動詞の場合と節の場合に大別されており、前者は「高い木」「親切な人」のような「通常の表現」と「彼は<u>疲れた夜道</u>をとぼとぼ歩いていった」のような「転移修飾」、後者は「日本放送協会の記者だった女性」のような「内の関係」と「トイレに行けないコマーシャル」のような「外の関係」にそれぞれ分類されていることを確認する。さらに第2章では、本研究の分析に適用する認知文法について述べ、カテゴリー化、構文ネットワーク、発話のグラウンドといった主要概念を導入している。</p> <p>第3章では、第2章で述べた従来の分類では取り扱えない連体修飾の事例が存在することを指摘し、認知文法の観点から新たな分類方法を提案している。具体的には、認知文法のカテゴリー化の観点から、修飾部と被修飾部の間で精緻化の関係が認められるものを「プロトタイプの連体修飾」、修飾部と被修飾部にそのような精緻化の関係が認められないものを「拡張的な連体修飾」と規定する。プロトタイプからの拡張・逸脱に段階性を想定することにより、先行研究では分類できなかった事例をプロトタイプの連体修飾と拡張的な連体修飾の中間的事例として位置づけ、連体修飾構文のネットワーク図を提示している。</p> <p>第4章では、第3章において「拡張的な連体修飾」として分類された事例を中心に分析を行う。拡張的な連体修飾には、修飾部と被修飾部が同一の対象を指す同格的用法や、被修飾部が修飾部の事象との時間的・空間的关系を表す用法が見られるが、本論文では特に、「魚を焼くにおい」のように、修飾部と被修飾部が隣接関係や包含関係にある連体修飾に焦点を絞り、詳細な意味分析を行う。</p>			

さらに第4章では、同様に拡張的な連体修飾に相当する転移修飾に関しても、一般性と特殊性の観点から分析を行っている。コーパスに基づいた量的な調査によると、感覚や感情を表す形容詞が修飾部となる連体修飾には、転移修飾の特徴を満たす事例の方が通常の連体修飾表現に比べて多く見られ、拡張的な用法が定着化している可能性を示唆している。その一方で転移修飾の事例には、先に挙げた「彼は疲れた夜道をとぼとぼ歩いていった」のように、文学作品などの特定の文体にしか生じない修辭性の高い表現も存在する。このような事例の新奇さは、副詞による修飾表現の方が一般的である場合にあって形容詞・形容動詞による修飾を選択することに起因するとの見方を示している。

第5章では、修飾部にモダリティや発話行為に関わる要素を含む連体修飾構文について分析を行っている。このタイプの連体修飾は、修飾部に含まれるモダリティや発話行為の要素の種類によって、連体修飾表現全体の容認度に相違が生じる。具体的には、根源的モダリティを含む節が修飾部となる場合の容認度は比較的高くなる傾向にあり、発話行為や丁寧表現に関わる節が修飾部となる場合は自然な表現として解釈しがたくなる。本論は、根源的モダリティ、認識的モダリティ、発話行為および丁寧表現が発話のグラウンドとの関わりの程度の点で異なることに着目し、認知文法のグラウンディングの観点から考察を試みている。

第6章では、各章の分析について概観し、本論文において明らかにされた連体修飾の特性について述べる。本論文の学術的意義を論じた上で、今後の研究への展望を述べ、本論文の結語としている。

## (論文審査の結果の要旨)

本論文は、認知言語学の立場から日本語の連体修飾構文に関わる諸現象について体系的説明を試みた理論的・実証的研究である。日本語の連体修飾に関する先行研究は、言語事実の記述と用法の分類が中心となっており、用法間の関連性については等閑視されがちであった。本論文は、認知文法の理論を基盤とすることにより、連体修飾の多様な用法を包括的に説明することを試みた、意欲的で独創的な研究である。以下で、連体修飾に関する日本語研究および理論言語学的研究としての本論文の意義を述べる。

日本語の連体修飾表現は、名詞に修飾部が前置することで構成され、修飾部は形容詞や形容動詞による場合と節による場合に大別される。従来の研究では、構造的な相違に基づきこれら2種類がまったく別個に扱われてきたが、これらを連体修飾という機能面から連続的に捉えることが本論文の最大の長特長と言える。このようなアプローチを可能にしているのが、本論文で適用する認知文法の理論的枠組みである。修飾部が形容詞の場合も節の場合も、典型的な用法は被修飾部と精緻化の関係が成立するのに対し、拡張的な用法では精緻化の关系到逸脱があること、さらに、典型的用法から拡張的な用法の間には段階性があることを示し、2つの形式の間の並行性を明らかにした点は評価に値する。また、連体修飾の様々な用法を関連づけ、構文ネットワークとして表示する試みも、認知言語学の説明力を裏づけるものとなっている。このように本論文は、日本語学における記述的研究では見えてこない側面を明らかにし、連体修飾の研究に重要な知見を提供するとともに、日本語研究に新たな分析の視座を提示し貢献をなすものである。

また、本論文の研究手法は堅実であり、作例に留まらずコーパスから実際の使用事例を収集し、量的分析を行っている。話しことばから文学作品に至るまで、幅広いジャンルを射程に入れている点も評価することができる。特に第4章において、コーパスから抽出したデータによって形容詞と名詞の共起強度を測定した調査は興味深い事実を示しており、転移修飾的な表現が通常の修飾表現よりも定着している場合があることを指摘した点は、言語学的に重要な研究成果である。

さらに、第5章では修飾節にモダリティや発話行為が含まれる場合を取り上げ、その容認性判断の相違がなぜ生じているか、認知文法の観点から分析することにより、興味深い諸側面を提示している。発話者・聞き手や発話の

場を包括した認知文法の概念である「グラウンド」の関与する程度が、モダリティ要素を含む連体修飾節の容認性に関係していると想定し、認知的モダリティや発話行為のようにグラウンドと密接に関わる要素を含む節は修飾部として機能しにくい傾向にあると分析を行っている。連体修飾を単に句構造レベルの問題とせず、発話行為や丁寧さといった語用論的事象にも分析の範囲を拡大している点は、学位申請者の幅広い言語学的知識と関心を反映したものである。

一方で、第5章の分析には課題も残されている。グラウンドの関与の程度を認知図式でどのように表示するかには検討の余地がある。また、モダリティや発話行為を分析対象とする上で、主体性・主観性という要因も考慮に入れる必要がある。これらの点については、学位申請者の今後の研究において改善が十分可能である。

以上、本論文では日本語の連体修飾構文について、一貫して認知文法に基づく説明がなされており、他の言語現象の分析との整合性や関連性も認められ、今後の発展が期待できる。本論文は、言語の構造、意味、運用に関わる人間の知のメカニズムの解明を目的とする言語科学講座の目的に沿った研究として高く評価することができる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年12月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 年 月 日以降